るたが、博士の據つたドーソン「蒙古史」の一二六八年なる叛亂開始の年次は要するにドーソンの私見にしてその出所は元史地理志にある事から、博士の所謂東西文獻の一致は實は支那文獻の傳へる一方的記錄が經路を異にしつゝ再び相會したものと斷じ、次にこの元史地理志の「至元五年海都叛」の記事はそれを動機として行はれた鐵連の出使が西方史料によると少くとも一二六七年以前となつて事實と符合せず、從つて至元五年（一二六八）說は成立せざる事を述べ、然らばこの年次は何年に比定すべきかについて元史安童傳の記載から先づその上限が至元二年八月にあることを定め次に至元二年八月以後、同五年以前といふ限界内に海都叛亂の年次を最も正確に傳へる史料としてマルコ・ポーロの旅行記を擧げ、そのいふ一二六六年（至元三年）なる年次が東西史料の示す關係記事の間に何等矛盾を生じないことから、この至元三年叛亂開始を確認した明快な考證である。

以上各篇につき蕪雜なる紹介を行つたが、東洋史に關するものとしては尙この外、國史の部に三品彰英氏「新羅と高句麗」地理の部に藤田元春氏「支那水運路の發達とその舟」考古學の部に梅原敎授「浙江省紹興出土の遺物と其の遺跡」水野淸一氏「付法藏傳と雲岡石窟」島田貞彦氏「滿洲熱河省大名城發見の遼代石棺等について」等があることを附記しておく。

（藤原利一郎）

支那政治史（上）

「支那地理歷史大系」第四編
昭和十六年五月、白揚社發行
四六判五一四頁、定價參圓

さきに支那地理歷史大系第七編として「支那社會史」が刊行された。それによつて我々は支那社會史の最も重要問題は階級問題であること――階級問題が社會史の重要問題の全てであるかどうかの是非は別として――少くともそれが同書に表はれた執筆諸氏の共通關心であることを知つた。社會史に關する限り問題とすべき項目が諸氏の間に少しは共通して居るのを見た。

所が今度の政治史を見て私の先づ感じたことは上の樣な共通性が執筆諸氏の間に著しく缺けて居ることであつた。古代史を書かれた小川氏は民族と國家の興亡を主流とし、秦漢の宇都宮氏は政治思想を中心とする。北朝の內田氏は加ふるに諸制度を以てし、隋唐五代の那波先生は天子の統治策に重きを置かれる。小川氏以下の四氏では外交軍事も含まれて居るが那波先生にあつてはそれが除かれて居る。强ひて共通點を求めるならば國家王朝の興亡、歷代天子の話とでもいふより外仕方がない。

一體この事は何を意味するのだらうか。編輯の不統一もその一原因だらう。だがもつと根本的にいへば結局は執筆諸氏の「政治」乃至「政治史」に對する觀念の相違に歸せざるを得ないと得ふ。私のひそかに空想する所では史書の最大の役目の一つは、現代我々の持つて居る諸々の觀念の更新にあると信じて居る。政治に就いて言へば「政治」なる言葉が我々に豫想させる色々の內容を、歷史を讀むことによつてより合理的なものに、より理想的なものに、又社會生活により便利なものに變へるのが史書の役目である少くとも史書はその樣な刺戟を讀者に與へる具であつて欲しい。

本書は殘念乍らこの目的に役立つこと餘り多いとは言へない樣である。宇都宮氏の考へはこの點に於て相當强い刺戟となり得る。氏の考へ方の當否は別としてもその筆者の觀念がはつきりして居ることによつて、讀者は筆者の觀念を起點として物を考へるのに非常に容易である。この事は私にいはすれば確に有益なことだ。結局この書全體から私が得た事は諸氏の觀念の不一致であり、その事自身は消極的に私をして政治史の何物たるべきかを考へしめる出發點とはなつた。けれども書物の編輯者としてはもつと積極的な刺戟を讀者に與へたいに違ひない。

尙その他全體の體裁をいへば繁簡その宜しきを得て居ないといふ嫌ひがないではない。例へば一方では唐の太宗に關して五十二頁を費し乍ら、他方六朝史全體が僅かに三十二頁に過ぎないといふ有樣である。それから小川氏、宇都宮氏に地圖が欲しかつた。又全體に一般讀者の見慣れぬ難しい漢字や固有名詞が何の用意もなく頻出し過ぎる。小川氏のものは內容の性質上特にその感が强い。一般讀者の爲に今後はもう少しお手柔かにと希望する次第である。

次に個々の執筆者に就いて思ひ付いた事を書いてみたい。

小川氏の古代史は一口に言へばその結構態度共に非常に學術的である。甲骨文金文の研究家としての氏の面目を遺憾なく發揮して居る。甲骨文金文を史料として古代史を書くことは我國でも始めての試みではない。近くは市村瓚次郎博士の東洋史統がある。尤も之は斷片的に史料として使はれて居るに過ぎない。又岡崎文夫博士の支那史概說にも稍組織的に金石學の紹介をして居られるが實際には史料として殆んど利用されて居ない。又中には東洋史講座（雄山閣）の橋本增吉博士の如く之を眞僞不明の代物と片づけて顧みない人さへある。この樣な現狀にあつて、始めて甲骨文金文を組織的に史料として取り上げ、之を最も重要な史料として殷代、西周の歷史を書いたのは正に小川氏が初めてである。尤もその一々の研究は殆んど支那人學者のそれであり、その點特に新研究があるとは思はれないが、とに角現在迄の我國に於ける最も進步的な古代史たることは明かである。

唯甲骨文金文の學問の動向を說明するのに頁を取り過ぎて文獻時代以降卽ち春秋戰國の叙述が稍お粗末なのが殘念だ。それと史料の少い古代史としては止むを得ないこととはいひ乍ら、時折餘りにも大膽な史料の使ひ方を見受ける。

宇都宮氏の秦漢政治史は本書隨一の力作である。それは政治史といふよりは一つの政治思想史に近い。正史の他に漢魏叢書に收められて居る樣な漢人の論著をよく讀み、而もそれ等の個々の思想に把はれずに、能く秦漢期全體の動きを大きく概念的に整理した氏の努力には敬服の他はない。この樣な試みは岡崎博士もして居られる。けれども岡崎博士では思想と共に史實がある。宇都宮氏にあつては史實も思想の中に織り込まれて了つて居る。その爲に概念は益々明確になつて居る。この事は前にも觸れた樣に讀者の歸趨を明確にせしめる意味で非常に有益な仕事だと思ふ。贊成もしやすく反對もしやすい。之を出發點として次の事を考へるにも大に便利である。私は凡そ論文は正にかくあるべきだと思つて居る。けれども通史を書く態度としては未だ之が最

善のものであるかどうか私にはよく分らない。司馬遷の偉さは自分の論旨に不利な史實をも忠實に擧げて居る點にあるといはれる。この方が初に述べた私の史書に對する注文によりよく合ふ樣な氣もする。併しとも角宇都宮氏のこの著によつて支那の政治の性格が著しく明確になつたことは確かだと思ふ。有高氏の總論にも支那では政治の理想と實際が甚だかけ離れて居ることを指摘されて居るが、宇都宮氏の文によつてその本質が具體的に明かにされた感が深い。

宮川氏の六朝史はどちらかといへば平凡だ。餘りに叙述の先を急ぎ過ぎて、讀者が一服すべき重點がない。文章も初から終りまでゝばかりで○がない感じである。

内田氏の北朝史も非常に面白い書き振りとはいひ難い。けれども氏には次の樣な長所がある。それはこの本の中でその叙述が最も統制的であるといふ點である。繁簡最も宜しきを得て居る。私はこの本を讀むに當つて一々要目を取つて見たのだが、氏の文ではチャンと要領のいゝ小見出しが着いて居るので全然その必要がなかつた。書かれて居る内容も穩當なものが多い樣に思つた。

その上内田氏は北朝の諸制度といふ一節を別に設けて居られるのが特に私の注意を惹いた。私の豫想した政治史の形式に近いからである。その内容も律令の制定、政治の中央組織、地方組織、司法權のあり方といふ風に、現代の政治に關する常識觀念の明確な圖式に基いて組み立てられて居る。宇都宮氏の樣な觀念とは全然違ひ、觀念そのものの說明は表面に表はれて居ないがその意圖する所は明かに看取される。たゞ私としては制度の變遷、延いては次の隋代への移り工合をも少し書いて欲しかつたと思ふ。

那波先生のは本書中の最長篇である。從つて内容も最も豐富である。殊に外交外征を除いてこの長さなのであるから他篇に比べて段違ひに事も多く叙述も丁寧である。それに若い人々と違つた一種の識見と熱情とを以て書かれて居るのがその特色といへよう。唐の太宗の名君振りに感嘆措く能はず、遂に本篇の殆んど半を太宗の德を稱ふるに費されたるが如きがその一例である。唯後半唐末五代に亙る記述が前半に比し餘りに簡略なのが私にはいさゝか物足りない樣に感じられた。何故ならば名醫の腕前は重病人に於て眞に發揮される如く、史家の技倆も國家衰亡の叙述に於て眞に發揮されるに違ひないと思ふからである。

有高氏の總論を言ひ忘れたが、氏の擧げられた支那の政治の諸性質はどちらかといへば私は近世の政治のそれの樣に思ふ。この上卷に收められて居る所はむしろ氏の指摘された諸々の弊害に赴く過程ではないかと考へる。けれども我々の最も問題にする所が現代の支那であつてみれば、我々の最も知りたい所は現代支那政治の性格である。その點で氏の叙述は要を得て居ると言へよう。

以上著者が私自身の知己であるのをいゝことにして勝手氣儘な事を並べたてたけれども、それは同じく東洋史研究會の一員として志を同じくする人々に膝を交へて腹藏なく語るといふ建前からしたことで、他意あつてのことではない。この點何卒不惡御諒承を乞ふ次第である。

（内藤戊申）